



Title	相互行為としてのほめ行動の様相と収束の構造 : 会話分析の手法とフェイスの概念を用いて [全文の要約]
Author(s)	趙, 文騰
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 <a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a>
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第15811号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/91959">https://hdl.handle.net/2115/91959</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Zhao_Wenteng_summary.pdf



## 学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（ 学術 ）

氏名： 趙文騰

### 学位論文題名

相互行為としてのほめ行動の様相と収束の構造  
-会話分析の手法とフェイスの概念を用いて-

本論文では、自然発生的な日本語会話と中国語会話を分析データとし、ほめ行動におけるほめられ側とほめ側の発話・振る舞い及びほめ連鎖の収束について分析した。分析にあたっては、会話分析の手法と語用論におけるポライトネス理論のキー概念であるフェイスの概念を用いた。本論文は7章で構成されている。

第1章では、まず本論文の目的を述べ、ほめの定義を提示した上で、本論文の構成を示した。相手に肯定的な評価を与える行為として、ほめは会話参与者間における連帯感を構築したり強化したりすることができ(Manes & Wolfson, 1981)、社会の潤滑油(Wolfson, 1983)と言われる。一方で、ほめ行動を成し遂げることは、一見すると、容易に思われるかもしれないが、実際には、ほめ行動において、ほめられ側もほめ側も難しい課題に直面する。ほめられ側にとっては、ほめられた後に、どのようにほめ返答を行うのかという問題が生じる。ほめをそのまま受け入れると、自画自賛になってしまい、ほめを否定すると、せっかくほめてくれた相手の好意を断ることになってしまう。さらに、ほめ返答がなされた後は、今度はほめ側が問題に直面することになる。それは、ほめが「常に受け入れられるとは限らない」(張, 2014b:138)からである。ほめられ側がほめを否定したり回避したりすることで、ほめを受け入れなかった場合、ほめ側はさらなるほめを行うか、それともほめを続けることをやめるのかという選択を行わねばならない。これまでほめ行動に関しては、ほめの対象物、ほめの表現やほめ返答の表現等様々な視点から研究されてきている。その結果、異なる場面におけるほめやほめ返答の形式上の特徴が明らかになっている。一方で、上記の「ほめられ側のジレンマ」や「ほめ側のジレンマ」に対して、ほめられ側またはほめ側がどのように振る舞っているのかについては未だ十分に解明されていない。特に、ほめが受け入れられなかった場合のほめ側の行動を分析した研究は、管見の限りなかった。また、上述のように、これまでほめ行動の機能とほめ行動の展開に関する分析はなされていたが、ほめ行動がどのように収束に向かうのかという点も明らかにされていない。以上を踏まえて、本論文では、会話分析の手法と語用論におけるフェイスの概念を用いて、「ほめられ側のジレンマ」や「ほめ側のジレンマ」に対して、ほめられ側またはほめ側がどのように振る舞っているのか、2つのジレンマが生じる相互行為としてのほめ行動がどのように収束に向かうのかを明らかにすることを

目的とする。

第2章では、本論文の理論的枠組みについて説明した。具体的には、まず会話分析において、基本的な会話の秩序とみなされている順番交替組織について説明した。発話する機会や権利が会話参加者の間で交替することを、順番交替 (turn-taking) という (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) では、自然会話を詳細に考察することで、発話の順番交替の背後にはいつ、誰が話すのかという基本的な規則があることを指摘し、その規則を順番交替組織 (turn-taking organization) と呼んだ。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) によれば、順番交替組織は2つの構成要素と1つの規則群からなる。実際の会話では、発話の重なりや沈黙が生じるが、その場合は、会話参加者が発話順番の放棄や取得等を行うことで、会話を大きな問題がなく進行させることができる (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)。これも、この順番の割り当ての規則群が作動しているからであると考えられる。

次に、本論文の分析に深くかかわる会話分析の概念を、隣接ペア、優先組織の順で紹介し、これらの概念がどのように分析に寄与するのかについて説明した。会話において、「挨拶-挨拶」や「ほめ-ほめ返答」のように、1つ1つの発話は特定の行為を達成しており、これらの行為の積み重ねにより会話が構成される。Schegloff (2007:2) によれば、このような2つ以上の行為の結びつきを秩序立てている仕組みは、「連鎖組織」 (sequence organization) である。連鎖組織の中で最も基本的な単位は、「挨拶-挨拶」や「ほめ-ほめ返答」のような、2つの発話が行う行為のカップリングによる連鎖である。それを「隣接ペア」 (adjacency pair) (Schegloff & Sacks, 1973; Schegloff, 2007:13-21) と呼ぶ。隣接ペアにおける1つ目の発話 (第一成分 (First Pair Part: 以下 FPP という)) と、2つ目の発話 (第二成分 (Second Pair Part: 以下 SPP という)) の間には「条件的関連性 (conditional relevance)」 (Schegloff, 1968) がある。串田・平本・林 (2017:80) が指摘したように、「ある位置で何らかの行為がなされるはずだという期待が生み出されていることを、その位置はその行為の生起に「関連性がある」と表現することができる」。例えば、「ほめ」が FPP であった場合、その次の位置には、「挨拶」ではなく、ほめに対する受け入れや否定等の「ほめ返答」という行為の生起が期待される。このような「条件的関連性」は、相互行為としてのほめ行動の構造を理解するのに必要であるだけでなく、日常会話の中からほめ行動を抽出する際にも寄与する。

隣接ペアの中には、FPP に対する SPP において、プラスとマイナスいう、相反する性質を持つ2種類のものが存在する (Schegloff, 2007)。プラス SPP とは FPP が開始する行為の実現を促すもので、マイナス SPP とはその行為の実現を促さないものである (Schegloff, 2007)。このように、選好されるかどうかという観点から見ると、2つの SPP の産出には非対称性が見られる。このような非対称性を「優先組織 (preference organization) (Schegloff, 2007) と呼ぶ。優先的 SPP と非優先的 SPP は、形式的にも異なりがある。優先的 SPP は、FPP の産出後直ちに、簡潔に、直接的に産出されるのに対して、非優先的 SPP は反応の遅延やためらい等の前置、間接的な表現の使用、理由や言い訳の説明等が伴う (Pomerantz, 1984; Sacks, 1987; Schegloff, 2007; 串田・平本・林, 2017; 高梨, 2016:32)。以上の「優先組織」の観点からほめ行動を考え

ると、「ほめ」に対する同意・受け入れの返答は「ほめ」によって開始されたほめ行動の実現を促すことから、選好される返答であるのに対し、不同意・否定の返答はほめ行動の進行を妨げることになるため、選好されない返答となると考えられる。しかし、ほめ行動はこの基本的な考え方から逸脱している。Pomerantz(1978)によれば、ほめへの同意・受け入れはほめられ側の自画自賛につながってしまうことから、それを避けるために、通常の隣接ペアにおけるマイナス SPP、すなわち、ほめへの否定・不同意が優先的になるのである(高木・細田・森田, 2016:6)。FPP と SPP との「条件的関連性」に加えて、この SPP の形式上の特徴も、直前の発話を分析するための重要なリソースとなりうる。

さらに、ポライトネス理論とそのキー概念であるフェイスの概念について述べた上で、フェイスの概念を援用し、本論文が注目するほめ行動にある2つのジレンマ、すなわち、「ほめられ側のジレンマ」と「ほめ側のジレンマ」について詳しく論じた。ポライトネス理論では、Goffman(1967)によって提唱されたフェイスの概念に基づいてフェイスを人間の基本的欲求として扱い、それを「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」に分類している。「ポジティブ・フェイス」(positive face, 以下 PF という)とは、他者から好かれたい、認められたいという欲求であり、「ネガティブ・フェイス」(negative face, 以下 NF という)とは、自己の行動と領域を他人から邪魔されたくないという欲求である(Brown & Levinson, 1987; 田中監訳, 2011)。フェイスの概念を援用して「ほめられ側のジレンマ」(Pomerantz, 1984; 趙, 2023)を考えると、ほめ行動は「評価」という性質を持ち(Pomerantz, 1978)、ほめに同意することはほめ側の考えへの同意となるため、ほめ側の PF を満たすことができる(古川, 2007)。しかし、ほめに同意することは、ほめられ側の自画自賛につながってしまい(Pomerantz, 1978)、ほめられ側の PF を脅かす恐れがある(Brown & Levinson, 1987)。一方、ほめを否定すると、ほめられ側の自画自賛を回避できるが、ほめ側の評価、すなわち、ほめ側の考えを否定することになり、ほめ側の PF を脅かす危険性を孕む(Pomerantz, 1978)。

ほめられ側がほめを否定したり回避したりすることで、ほめを受け入れなかった場合、今度はほめ側がさらなるほめを行うかどうかという課題に直面することになる。ほめを続けると、改めてほめられ側の PF を満たすことができるが、再度ほめられ側を、ほめを受け入れるかどうかという「ほめられ側のジレンマ」に直面させ、ほめられ側の NF を侵害することになってしまう。一方、ほめを続けないと、ほめを続けないことがほめられ側の否定等の返答への同意になってしまうため、ほめられ側の PF を脅かす危険性を孕む。ほめ側自身のフェイスから考えると、ほめを続けることは、自らの評価・考えが受け入れられるチャンスを作り出すことになり、自らの PF を満たす可能性を生み出す一方で、ほめが再度受け入れられず、自らの PF が再び脅かされるという危険性も伴う。これは本論文でいう「ほめ側のジレンマ」(趙, 2023)である。

第3章では、ほめ行動に関する先行研究を概観した上で、これまでのほめ研究の問題点を指摘した。それに基づき、本論文の位置付けを述べ、本論文がこれまでの問題点をいかに克服するするのかについて説明した。ほめ返答に関する研究は、ほめ返答を大きく「受け入れ」、

「回避」、「否定」の3つに分類し、さらに複数の下位ストラテジーに分けた上で、性別、親疎関係やほめの対象物等によって、各返答ストラテジーの使用頻度を考察することが多かった。しかし、これらの研究は、各ほめ返答の出現頻度の提示に留まる傾向があり、そのほめ返答がどのような相互行為上の機能を果たしているのかについては詳しく分析していない。会話分析の手法を用い、「ほめられ側のジレンマ」という観点からほめ返答の相互行為上の機能について分析した研究として、Pomerantz(1978)、張(2014a)が挙げられる。「ほめられ側のジレンマ」に対処可能なほめ返答ストラテジーとして、Pomerantz(1978)は「ほめの格下げ」(Praise Downgrade)と「ほめ対象のシフト」(Referent Shifts)、張(2014a)は「焦点ずらしの返答」を指摘しているが、当然ながら、「ほめられ側のジレンマ」に対処するストラテジーは以上のものにとどまるものではない。例えば、ほめ返答であると同時に、ユーモアまたは自己卑下という行為を達成している事例がしばしば観察される。つまり、ほめのFPPがなされた後、それに対するSPP、すなわち、ほめ返答の生起が期待される位置に、自己卑下またユーモアという特定の行為が行われているという点で、Pomerantz(1978)、張(2014a)が指摘した3つのストラテジーと異なる。以上を踏まえ、本論文では、会話分析の手法とフェイスの概念を用いて、「ほめられ側のジレンマ」という観点からほめ返答の位置に現れたユーモアや自己卑下に注目して分析する。

「ほめ側のジレンマ」にかかわる研究は、管見の限り、張(2014b)しかない。張(2014b)はこれまでのほめ研究の問題点を指摘し、ほめ行動には、「ほめられ側のジレンマ」だけではなく、「ほめ側のジレンマ」も存在することを指摘している。ただし、その分析において、張(2014b)は、主にジェスチャー、笑い、言いよどみというほめ行動における非言語行動・パラ言語の役割に焦点を当てており、ほめ側がどのように自らが直面する「ほめ側のジレンマ」に対処しているのかについては分析していない。言い換えれば、張(2014b)は、「ほめ側のジレンマ」の存在を指摘しているものの、対処の具体は明らかにしていない。以上を踏まえて、本論文では、「ほめられ側のジレンマ」のみならず、ほめが受け入れられなかった後に生じる「ほめ側のジレンマ」にも注目し、それに直面しているほめ側がどのような行動を取っているのかについて分析する。

ほめ行動には「ほめられ側のジレンマ」及び「ほめ側のジレンマ」が生じうるため、どのようにほめ連鎖を収束するのか、また、どの時点でほめ連鎖を収束するのかということは、ほめられ側とほめ側両者のフェイスにかかわっている。つまり、複雑な相互行為としてのほめ行動において、会話参加者は自らのフェイスと相手のフェイス両方に考慮しながらほめ連鎖の収束手続きを行う必要があると考えられる。一方で、相互行為としてのほめがどのように収束するのかはまだ解明されていない。以上を踏まえ、本論文では、ほめ行動の収束について分析する。

続く第4章から第6章では、データ分析を行なった。第4章では、まず、本論文のデータの概要を説明した。本論文では、公開されている4つの会話コーパス及び筆者が収集した中国語日常会話をデータとして用いる。4つの会話コーパスはそれぞれ日本国立国語研究所による『日

本語日常会話コーパス』(以下CEJCという)、『BTSJ日本語自然会話コーパス(2020年版)』(以下BTSJという)、米ペンシルバニア大学による『CallFriend』、中国海洋大学によるDIG Mandarin Conversations(以下DMCという)である。CEJCは、協力者に機材機器を貸し出し、協力者に日常会話を記録してもらい、多様な場面の会話を集めた映像付きのコーパスであり、BTSJは、調査協力者の年齢、性別、話題等が統制された音声コーパスである。CallFriendは、日本語、中国語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、等様々な言語による電話会話コーパスであり、DMCは2023年に公開されたばかりの中国語標準語による電話会話コーパスである。以上に加え、筆者が中国語母語話者の協力者自身に記録してもらった中国語日常会話における雑談場面の音声を用いる。本論文では、これらのデータから合計19個のほめ事例を取り上げた。

次に、ほめられた後、ほめ返答の生起が期待される位置に自己卑下またはユーモアが現れる事例に注目し、会話分析の手法を用いて記述・分析した上で、フェイスの概念を援用し、これらのほめ返答の位置に現れる特定の行為がどのような行為を達成しているのかについて分析した。事例分析の結果、ほめ返答の生起が期待される位置に現れるほめられ側の自己卑下は、ほめ返答として機能しつつ、ほめられ側の好ましくない特徴を呈示することで暗示的にほめを否定することができる。そのため、ほめを受け入れることにつながる自画自賛となることを回避すると同時に、ほめ側のPFへの侵害も避けられることが分かった。また、ほめ返答の位置に現れるユーモアはほめ返答として機能しつつ、冗談めかしながら暗示的にほめを否定することができる。そのため、ほめへの受け入れによる自画自賛を回避できると同時に、ほめ側のPFに配慮していることが分かった。つまり、これらの2つの行為のいずれも、ほめ返答の位置で現れることでほめ返答として機能すると同時に、その時点でほめられ側が直面する「ほめられ側のジレンマ」に対処するという行為を達成していると考えられる。

第5章では、ほめが受け入れられなかった後に生じるやりとりを取り上げ、「ほめ側のジレンマ」に直面したほめ側が行う行動として、「関連情報の確認」、「ほめる根拠の追加」、「ほめ側の自己卑下」に注目した。会話分析の手法を用いて事例の記述・分析をした上で、フェイスの概念を援用しそれらの行動がどのような行為を達成しているのかについて考察した。事例分析の結果、「関連情報の確認」、「ほめる根拠の追加」及び「ほめ側の自己卑下」は共通して、即座にほめを続けることを避けることで、ほめられ側をさらなる「ほめられ側のジレンマ」に直面させることがない。また、直接的に再ほめを行わないことで、ほめ側はほめが続けて受け入れられないというリスクを回避することができる。以上の2点に加え、「関連情報の確認」はその後続連鎖に見られる再ほめを自然に行うためのリソースを得ることができる。また、「ほめる根拠の追加」は直前の否定されたほめを補強することができる。そして、「ほめ側の自己卑下」は自らを押し下げることで、ほめられ側を持ち上げることができ、間接的にほめとして機能している。以上のことから、ほめが受け入れられなかった後にほめ側が行った「関連情報の確認」、「ほめる根拠の追加」及び「ほめ側の自己卑下」は、ほめられ側とほめ側両者のフェイスに配慮しているため、「ほめ側のジレンマ」に対処するという行為を達成

していると考えられる。

第6章では、第4章と第5章で提示したほめ事例及びその後続連鎖のうち、ほめが受け入れられないことが続く事例に注目し、ほめ連鎖の収束を可能にした手続きを分析した。その結果、以下のようなことが分かった。まず、TRPに至ったにもかかわらず、現話者が自発話継続を行って発話順番を相手に取得させず、ほめ返答やほめ直しに対するさらなる返答を回避しほめ連鎖をこれ以上展開させないことは、それまでのほめ連鎖を収束させることを可能にする。また、笑いの共有はそれまでの話題の終結と関連しており、笑いの共有の次のターンは新たな話題が導入される適切な場所となる(Holt, 2010)ため、ほめ返答の位置に現れたユーモアに対する笑いの共有はほめ連鎖の収束を可能にする。一方で、すべてのほめ連鎖の収束には明確なほめ連鎖の収束手続きがあるわけではない。ほめが受け入れられなかった場合、ほめ(直し)とそれに対するほめ返答というやり取りが何度も繰り返された後の位置でほめ側がさらなるほめ直しを行わないことや、ほめられ側がほめ返答の位置で最小限の返答だけを発することは、上記の諸手続きを使用しないままほめ連鎖を収束させることを可能にする。

最後に第7章では、本論文をまとめた上で、本論文の研究意義と今後の課題について述べた。本論文では次の4つの意義があると期待される。第一に、ほめに関する研究に残された問題の解決に寄与すること、相互行為としてのほめ行動の全構造への理解の促進に貢献することである。第二に、本論文はほめ行動を分析するものであるが、そこから得られた結果と示唆が他の言語行動(例えば、自己卑下やユーモア)の分析にも活用できることである。第三に、本論文では日中両言語の日常会話をデータとして用いたことで、日中両言語への理解及び言語を超えた相互行為の秩序性への理解の促進に貢献することである。最後に、会話分析における優先組織の概念と語用論におけるフェイスの概念を用いて分析を行ったことで、会話分析と語用論の理論的發展に貢献することである。今後の課題として、多人数によるほめ会話における第三者の振る舞いと参与役割、ほめ行動における自己卑下の産出とその後の次発話継続の発生と関係性について分析していきたい。さらに、本論文で使用したデータの一部は音声のみとなっているため、会話参加者の視線やジェスチャー等は観察することができなかったという問題点がある。今後は映像付きのデータを用いて、相互行為としてのほめ行動について考察を続けていきたい。

## 参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子監訳(2011). ポライトネス 言語使用におけるある普遍現象 研究社.)
- Goffman, E. (1967). *Interaction Ritual: Essays in Face-to-face Behavior*. ALDINE Publishing Company.

- (浅野敏夫訳(2012). 儀礼としての相互行為: 対面行動の社会学 東京: 法政大学出版局.)
- Holt, E. (2010). The Last Laugh: Shared Laughter and Topic Termination. *Journal of Pragmatics*, 42(6), 1513-1525.
- 張承姫(2014a). 相互行為としてのほめとほめの返答—聞き手の焦点ずらしの応答に注目して— 社会言語科学, 17(2), 98-113.
- 張承姫(2014b). 会話参加者の立場から分析する「ほめ」と「ほめの応答」—会話分析手法を用いた日韓ほめの分析— 言語コミュニケーション文化, 11(1), 135-148.
- 串田秀也・平本毅・林誠(2017). 会話分析入門 勁草書房.
- Manes, J., & Wolfson, N. (1981). The Compliment Formula. In Coulmas, F. (Ed.), *Conversational Routine: Explorations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech*. 116-132. The Hague, the Netherlands: Mouton Publishers.
- Pomerantz, A. (1978). Compliment Responses: Notes on the Cooperation of Multiple Constraints. In Jim, S. (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. 79-112. New York: Academic Press.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes. In Atkinson, M. J., & Heritage, J. (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1987). On the Preferences for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation. In Graham, B., & John. R. E. L. (Eds.), *Talk and Social Organization*, 54-69. Multilingual Matters.
- Sacks, H., Schegloff, E.A. and Jefferson, G. (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation. *Language*, 50 (4), 696-735. (「西阪仰訳(2010). 会話分析のための順番交替組織—最も単純な体系的記述— 会話分析論集: 順番交替と修復の組織, 7-153. 世界思想社.)
- Schegloff, E. A. (1968). Sequencing in Conversational Openings, *American Anthropologist*, 70(6), 1075-1095.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis I*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up Closings. *Semiotica*, 8, 289-327. (北澤裕・西阪仰訳(1995). 会話はどのように終了されるのか 日常性の解剖学: 知と会話, 175-241. マルジュ社.)
- 高木智世・細田由利・森田笑(2016). 会話分析の基礎 ひつじ書房.
- 高梨克也(2016). 基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法 ナカニシヤ出版.
- 趙文騰(2023). ほめが否定された後のほめ側の行動—会話分析の手法とフェイスの概念を用いて— 社会言語科学, 26(1), 213-227.
- Wolfson, N. (1983). An Empirically Based Analysis of Complimenting in American English. In Wolfson, N., & Judd, E. (Eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition*, 82-95. Rowley, MA: Newbury House.